

# 神戸大学と

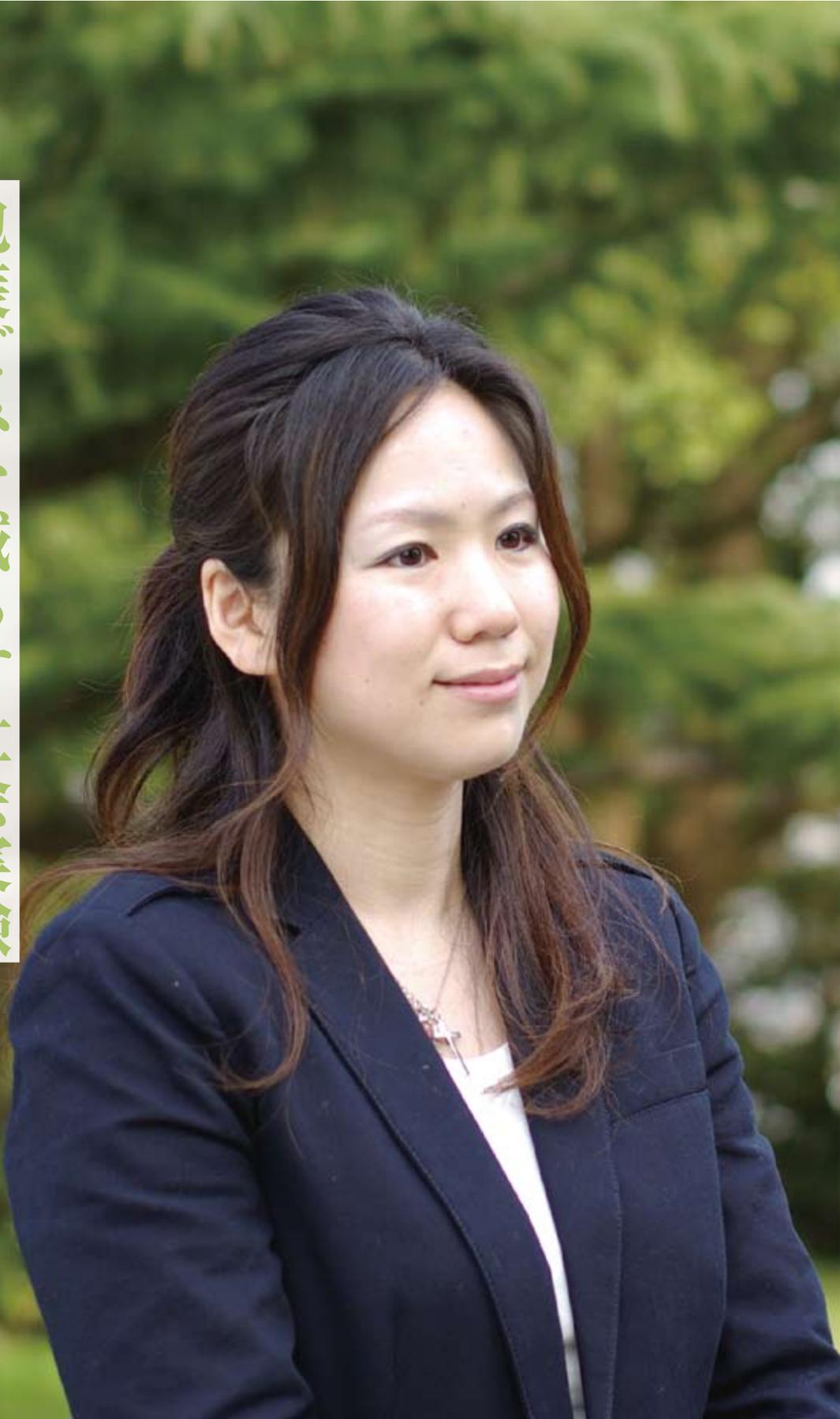
Across the Boundaries

# No.2

神戸大学のメタモルフォーゼを伝えるメディア

# わたし

「社会に貢献する神戸大学」  
NPO法人ごみじやぱん事務局長・小島理沙さんを訪ねて  
石川雅紀・神戸大学大学院経済学研究科教授(NPO法人ごみじやぱん代表)に聞く  
「ボランティア活動レポート」中越・KOBEE足湯隊



「減装へらそうショッピング」に学生とともに取り組む。  
包装ごみを減らす社会実験



## 小島理沙

(こしま・りさ)

NPO法人ごみじゃぱん事務局長  
京都市出身。2000年3月、滋賀大学経済学部卒業。同年4月、西濃運輸株式会社入社。エコビジネス部で幹部物流を担当。2007年4月、神戸大学大学院経済学研究科博士前期課程修了(経済学修士)。同年4月、2010年3月、神戸大学教育研究補佐員(経済学部ESDコーディネーター)。2010年4月より同大経済学部非常勤講師。2006年9月より、NPO法人ごみじゃぱん事務局長。

# 包装ごみを減らす社会実験「減装ショッピング」に 学生とともに取り組み。

包装ごみを減らそうという目的で設立されたNPO法人ごみじゃぱん(代表理事：石川雅紀・神戸大学大学院経済学研究科教授)。その活動が包装ごみ減量化の突破口を開くものとして、また産官学民連携した大学発NPOの新しいかたちとして注目されている。

## ●仕事を通してごみ問題の現実を直面

小島さんが環境経済学を志して神戸大学の門を叩いたのは、就職した会社での仕事体験がきっかけだったと言います。

4年あまり勤めた大手運送会社では、産業廃棄物の処理やリサイクルのためのソリューション提案営業に携わった。その中で、あらためて学術的に環境問題を捉え直したいという思いが強まっていたとき、青森と岩手の県境で産業廃棄物の大規模な不法投棄事件が発生し、自社で手がけたものがないかどうか冷や汗をかいた。

「毎日が『廃棄物六法』と首つ引きの仕事でした」

いきなりレイズンばかりのリアルな現場を体験したことが、ごみ問題への関心をさらに掻き立て、とうとう研究者への道を選択させたのである。小島さんは、2005年4月、神戸大学大学院経済学研究科に入学した。

## ●学生が主導するNPO活動

その年、NPO法人ごみじゃぱんの設立準備が始まった。小島さんはその職業経験を高く買われ、院生の立場でNPO法人設立の準備作業に深く関わることになった。2006



●減装商品POP  
消費者がスーパーの棚にある商品を選んで買い物カゴに入れる。まさにその“Point of Purchase”で「こちらの商品が包装ゴミの少ない商品です」と訴える。

年秋に「ごみじゃぱん」が内閣府の認可を受けて正式にNPO法人となつてからは事務局長として活動の中心を担っている。

「ごみじゃぱん」が目指す大目標は「無理なく、ごみを減らせる社会づくり」。そのための第一歩として、包装ごみの少ない商品を購入者にも買ってもらう社会実験「減装ショッピング」を神戸市内のスーパーで展開中だ。

NPO法人の形態をとることで、学外からもマーケティングや広告・広報分野のプロに参加してもらうことが可能になった。しかし

活動の主体はあくまでも学生が中心。学生が自分たちでキャンペーンの目標を設定し、スーパーで販売されている商品の中から、包装がより少ない商品を選んで推奨し、プロモーションを企画する。小島さんはそのコーディネーターである。

## ●「減装ショッピング」

2007年2月、「ごみじゃぱん」の初めてのキャンペーン「六甲アイランド簡易包装プロジェクト」が始まった。ポイントはどうな商品を推奨するか。①個別包装なし、②トレイなし、③プラスチック包装なしなど8項目の推奨基準を決めて280点の商品を推奨した。プロのアドバイスを受けながら、店頭でのPOPやチラシ、ポスターなどマーケティングの方法も企画した。消費者がある程度簡易包装商品を選択することはわかったが、検証すべき課題は残った。

翌年には、規模、推奨品目、キャンペーン内容などすべてをバージョンアップして神戸市内4店舗で3か月間「ごみ減装実験2008」キャンペーンを実施。推奨品目1500点の選定も、「減装」のネーミングを考案したのも学生たちだ。

また、キャンペーンの前後で生活者の意識がどう変わったか、家庭への訪問による意識調査も学生たちが分担して行った。

## ●迷った時は生活者目線で

しかし、学生たちがいくら討論を繰り返し



●学生主催のキャンペーンで東灘区のごみ拾いを行う

でも結論がでない難問にたびたび遭遇した。たとえばバスタソックスひとつとつとつとみて、スーパリーの棚にはレトルトパウチ、ガラスビン、缶詰と、異なった包装形態の商品が並んでいる。容量も異なる。どう分類するか学生だけでは結論が出せない。

「そういう時には、学生と一緒に生活者に聞きに行きます」と、小島さん。

神戸市や市民団体が開催するごみ関連の勉強会やワークショップに学生を参加させて、「みなさんちょっと教えてください」と市民に教えてもらうのだ。

頻繁にごみの集まりに顔を出しているうちに小島さん自身も講演者、コーディネーターとして集まりに欠かせない存在になってきた。

### ●信頼性を担保する神戸大学の存在

キャンペーン結果やアンケート結果は学術的に分析される。協力店舗からは各商品の日々の販売数量が膨大な量のデータとして提供されるが、その日によって増えたり減ったり、天気やワゴンセールの影響に隠れてしまいいきキャンペーン効果は全く見えてこない。その膨大なデータを統計学の分析モデルを作って解析する。モデルの作成は主に石川先生が担当するが、作成したモデルの検証やデータのクリーニングが佳境に入ると研究室では何日も徹夜が続くことになる。

「啓発運動に流れてしまつとすぐ先生に怒られます」

単に「売れました」で終わってしまえば大学として関わる意味がない。学術的に検証可能なかたちで定量・定性的な評価を出すことに「ごみじゃぱん」はこだわる。

「学生の積極性と生活者の目線に依拠しながらも、軸足はしっかりと神戸大学に置いてい

ることが、『ごみじゃぱん』が地域や企業の信頼を得てきた大きな要因だと思っています」と、小島さんは強調する。

### ●学生たちのパワーをつないで

3・4回生のメンバーは毎年入れ替わっていくが、その活動成果はNPOにきちんと蓄積されていく。その経験を引き継ぎ連続性を保証するのが小島さんの役割だ。

学生に「自分たちの好きなように企画していいよ」と言うと、みんな最初は戸惑う。どうしていいのか分からない。それでも、ワークショップや合宿を繰り返すうちに、どんどん新しいアイデアが出て、具体的な形が見えてくる。それは「苦しくて楽しいプロセス」だと小島さんは言う。

「今までにない新しいものを創造する力が若い人たちには間違いなくあります」

「ごみじゃぱん」の活動を体験して社会に出て行く学生たちには、単なる「プレゼン上手」になるのではなく、「その場その場で社会貢献を考へる人になって欲しい」と訴える。その心遣いが学生たちの個々のパワーをつないでひとつの力にしている。

#### 「NPO 法人ごみじゃぱん」概要

- 設立  
2005年9月25日
- 代表  
石川雅紀  
(神戸大学大学院経済学研究科教授)
- 事務局  
神戸市灘区六甲台2-1  
神戸大学(経済学部)内 第2研究室 107  
TEL.078-803-3005  
FAX.078-803-3006
- ホームページ  
<http://gomi-jp.com>



神戸大学大学院経済学研究科教授  
**石川雅紀** (いしかわ・まさのぶ)

●1960年生  
神戸市生まれ。  
●1984年  
東京大学工学部大学院 単位取得満期退学。  
東京水産大学(現東京海洋大学) 助教などを経る。  
●2006年  
神戸大学大学院経済学研究科教授(現職) 専門は環境経済学。  
●2009年  
NPO法人ごみじゃぱんを設立し、代表に就任。  
日本包装学会会長などもつとめる。

# 簡易包装普及運動『減装シヨッピング』の 論理と展望は何か？

## ●環境経済学の視点

**Q** まずご専門の研究分野についてお聞かせください。

**A** わたしの専門は環境経済学、その中でも「環境システム分析」を中心に研究しています。元々は化学工学の出身で、学位論文では自然の中で海の流れや赤潮発生のシステムを分析していました。今では対象が経済を含む社会システムへと拡がりました。合理的なリサイクル、省エネルギー、温暖化問題など、政策的な、より現実に近い立場で分析しています。

## ●近年、市民の間でも

**Q** ごみの分別回収への理解が深まっているようにみられますが…

**A** 確かにリサイクル率は上昇していますが、埋め立てられる量は減っていません。しかし資源として収集されたモノ全体としての不要物の量はあまり減っていない。たとえば、自治体が家庭ごみの分別回収を開始すると、分別の手間が増えるだけでなく、部屋の中のごみ箱が大きくなり貴重なスペースを取られます。ごみの分別で環境面でのコストが下がったとしても、結局は市民の「手間ひま」に私たちを変えて市民に負担を押しつけてだけです。それには自ずから限度があります。分別回収を政策としてきちんと検証するには分析のためのモデルが必要です。過去の経験的なデータも入れて、家庭ごみをどう

分別してどのような頻度で回収すればどうなるかというモデルをつかえばより有効な政策の立案が可能になります。環境問題は「決めただからやるべき」という「べき論」に陥りがちですが、「べき論」では問題は解決しません。システム分析はそんな「べき論」とは無縁のアプローチ方法です。

## ●社会実験を担う

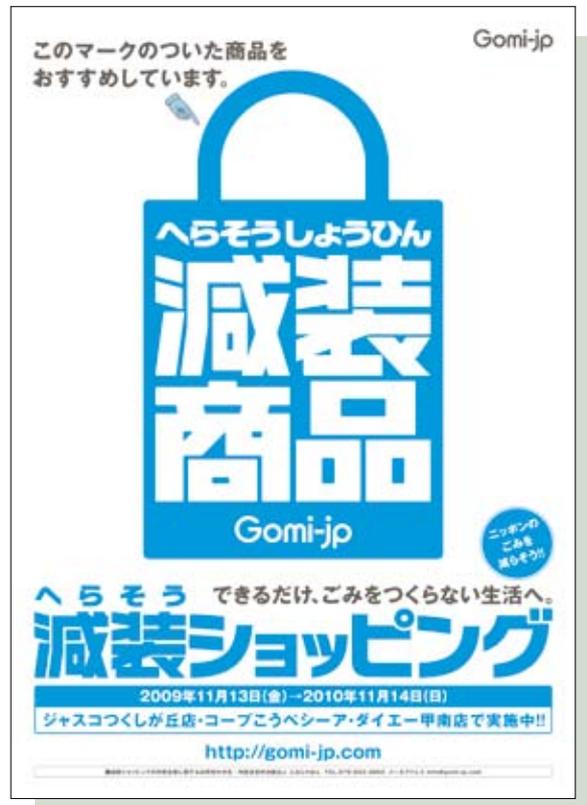
**Q** 「NPO法人ごみじゃぱん」「減装シヨッピング」が注目されていますが…

**A** 2005年に「簡易包装普及のためのシステム検討委員会」という研究会で、生活者の意識を調査するために「デフス・インタビュー」を実施しました。デフス・インタビューとは、専門知識を有した調査員が調査対象者と一対一で面談し、関連する情報を提供しながら対象者の回答を聞き出す調査方法で、より潜在的な意識が明らかになると言われています。その調査で明らかになったのは、日頃から熱心にごみの分別をしている人も実はそれを「面倒くさい」と思っていて、また、日頃は分別なんか面倒くさくしてないで済ませている人も、たとえばお隣のおばあちゃんに「ちよっとあんな！」なんて言われるのが嫌で分別したりする。どちらも「やるべき」「やるしかない」という意識が「面倒くさい」に勝っていると分別をする。ところが

が一方で、「容器包装のごみ処理だけで日本全国で一兆円ぐらい費用が掛かっていて、それを半分に減らすことが出来れば5000億円ほどの費用が節約でき、それを年金の原資に回すことも出来る」と情報を与えたうえで、「購入する時にごみの少ない商品を購入すれば発生するごみを減らせますがどうですか」という質問をすると、ほぼ全員が「そうする」と回答しました。ごみ捨て時にはフリーライド(ただ乗り)する人も、商品を買う時には目印があればそっちを買う。要するに「ごみの分別は面倒くさいけど、買う時にごみの少ない商品を選ぶのは構わない」という訳です。直接のリターン(インセンティブ)はないのに行動が変わることは経済学で仮定される経済人モデルでは説明が付かない。でも、市民感覚としては理解できないこともない。

**Q** それを検証するために「ごみじゃぱん」の設立を…

**A** その通りです。そのような生活者の意識構造を包装ごみの発生抑制に結びつけることが出来るのではないかと思いました。ただ、これまでも生活者・消費者向けの環境意識調査はあらゆるレベルで実施されていて、調査結果と行動との間には大きなギャップがあることも明らかになっています。だからアンケート結果だけでは企業は動かない。動かせません。誰かがそれを実証しなければならぬ。そのため「ごみじゃぱん」を設立しました。



●減装ショッピングのポスター

●デファクトスタンダードを  
目指す社会実験

**Q** 2006年秋にNPO法人として認可を受け、翌年2月に初めての社会実験を開始されていますね。

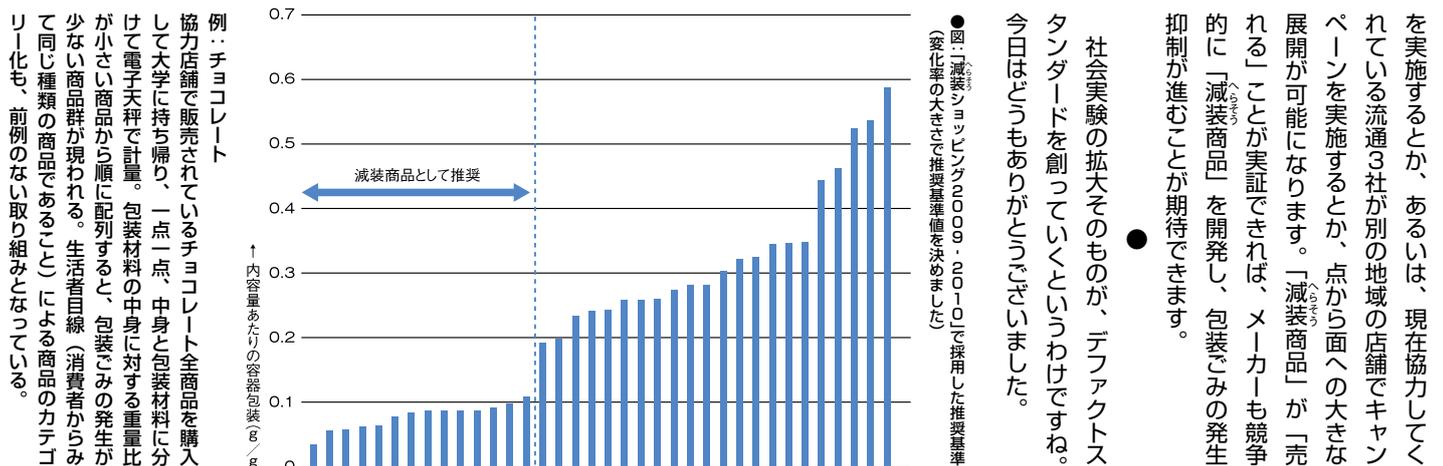
**A** はい。2006年から準備は進めています。初年度は環境庁の3R促進基金と神戸大学の助成金を得て2007年2月に「簡易包装を買いおろプロジェクト」として六甲アイランドのコープこうべで1か月のキャンペーンを実施しました。その結果を踏まえ、2008年には企業の協賛を得て5月から8月まで東灘区のコープこうべとダイエー各々2店舗で3か月の「ごみ減装実験2008」を展開。そして現在進行中の「減装ショッピング2009・2010」ではジャスコにも参加してもらって、流通3社の店舗で1年間のキャンペーンを続けています。

**Q** 具体的にはどのような成果が挙がっていますか？

**A** もともと元気で、地域での好感度も高く、包装ごみに関する意識も高まっています。店舗から提供されるPOSデータの統計的な分析によって、「減装商品」として推奨している商品の販売が増加していることも定量的に実証されています。2008年の実験では3か月のキャンペーン効果で「減装商品」の売上は食品が8・52%、生活雑貨が14・4%増加し、数量では約17万個の商品が売れ、通常包装の商品との比較で、包装ごみ1・18トン、CO<sub>2</sub>で2・08トンの削減に結びつきました。これまでは、このように定量的に結果評価を出している類似の実験はなく、「ごみじゃばん」としても活動のノウハウを蓄積し、分析結果からは具体的な展開の可能性が見えてきています。

**Q** 「減装ショッピング」の「これからの課題は何ですか？」

**A** この実験は、当初から「神戸大学の石川ゼミの学生を中心とするNPO法人ごみじゃばん」と協力企業の専門家が主体となり、具体的な活動は研究室のスタッフと学生が担ってきました。逆に言えば、これまでのやり方では学生が地理的・物理的に行けない店舗では実施できません。そのため「減装ショッピング2009・2010」では、神戸大学の学生が行かなくてもキャンペーンが実施できるように、マニュアル化を進めています。推奨基準も、主観を一切排除して、中身に対する包装資材の重量比だけにしました(下図参照)。マニュアル化するこ



# 中越・KOBEBE足湯隊

神戸や大阪、新潟の大学生が中心になって組織した学生ボランティアネットワーク「中越・KOBEBE足湯隊」が、各地で活躍している。「足湯」という手法を用いて被災者とのコミュニケーションを図り、被災地の復興のあり方を模索している。

## 鈴木孝典

中越・KOBEBE足湯隊前代表・  
発達科学部 人間環境学科3回生



## 後藤早由里

中越・KOBEBE足湯隊代表・  
医学部保健学科2回生

### ●被災者の「つぶやき」を聞く

今年の2月14日、日曜日の午後、輪島市門前町黒島にある名願寺に「足湯」をする学生たちの姿があった。「中越・KOBEBE足湯隊」の第18次能登派遣隊の面々である。神戸大学を中心に、神戸学院大学、長岡技術科学大学、金沢大学の学生たち、それに社会人を含めて総勢15人以上のメンバーが参加していた。

足湯といえば温泉街や観光地にあるものごとを思い出すが、中越・KOBEBE足湯隊の「足湯」は、それとはちょっと違う。足湯をする人は椅子に座り、お湯を張ったたらいに足を浸す。ここまではほぼ一緒。違うのは、学生ボランティアが対面し、足湯をする人の手をひたすらもみほぐすこと。

足湯隊の「足湯」には、もつひとつ大事なことがある。それは、被災した住民の心の「つぶやき」を聞くということである。温かいお湯ともみほぐしのせいで何気なく表出される被災者の言葉に耳を傾ける。そのうち被災者の気持ちがほぐれていくのを身近に感じて、足湯ボランティアをしていく側の気持ちもほぐれていく。

「ホッとするんですよ」  
去年の春から足湯隊の活動に参加している新代表の後藤早由里さんは言う。

「つぶやきを聞きながら手をもみほぐしていると、そのうち周りのことがまったく気にならなくなるんですよ」

### ●能登半島地震を機に結成

中越・KOBEBE足湯隊は、2007年3月25日に発生した能登半島地震の際、神戸大学をはじめ、大阪大学、神戸学院大学、長岡技術科学大学などの学生が集まって結成した足湯ボランティアネットワークである。神戸大学からは、学生サークルである「神戸大学学生震災救援隊」が参加した。

足湯はもととも1995年の阪神・淡路大震災の際、市民ボランティアの救援活動の中から誕生したのだが、その後、2004年10月の新潟県中越地震を経て中越・KOBEBE足湯隊に受け継がれてきた。そういう経緯から、事務局は神戸の市民ボランティア組織である「被災地NGO協働センター（村井雅道代表）」におかれている。

鈴木孝典さんは、中越・KOBEBE足湯隊の前代表だ。2008年の入学以来この2年間、能登（2007年3月能登半島地震）をはじめ、新潟（2007年7月新潟県中越沖地震）、防府（2009年7月水害）、佐用町（2009年8月水害）と、寸暇を惜しんで被災地を訪れ足湯を行ってきた。

「能登へは入学当初から継続的に行っています」  
地震の被害が大きかった輪島市をはじめ、穴水町や門前町へは何度も通った。

「能登に行くにつれ、いろんな人と出会い、土地の魅力にも触れました」  
新入生のサークル勧誘のときには、そうした面



白い人やすごい人に会えること（それとおいしい食べ物のこと）を誘い水にするのだと言った。

### ●全国足湯ボランティア交流会

しかし、時を経るにつれ、能登では復興住宅が建ち仮設住宅もなくなって、足湯ボランティアの形態も変化してきた。かつてのように仮設住宅を訪ねれば、そこで被災者の方が待っていてくれるという状況がなくなったのである。

「ですから地域の祭りにも参加するし、商店街やお寺など、新しい場所で足湯をする機会も増えました」

そう語る鈴木さんは、地域のコミュニケーション活性化の手段としての足湯に大きな可能性を見出しているようだ。

昨年10月31日と11月1日の2日間、神戸大学学生震災救援隊の呼びかけで「全国足湯ボランティア交流会」が神戸で開かれた。参加したのは、神戸大学、神戸学院大学、長岡技術科学大学、東北福祉大学、金沢大学、大阪大学の現役学生と卒業生。各地の活動報告、足湯講演会、パネルディスカッションなどを通じて明らかになったのは、足湯が災害救援ボランティア活動の新しい文化として全国に普及する可能性を持っているということ。それを現実化するためにも、足湯の意義を改めて確認し今後一層のネットワーク拡大を図る必要がある。

### 「足湯講習会」受付中!

足湯を受けてみたい、ボランティアをやってみたいという方は、ぜひ被災地NGO協働センターまでご連絡ください。  
●中越・KOBEBE足湯隊  
連絡先: 被災地NGO協働センター  
〒652-0801  
神戸市兵庫区中道通2-1-10  
TEL: 078-574-0701  
FAX: 078-574-0702  
E-mail: ngo@pure.ne.jp  
●神戸大学学生震災救援隊  
〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1  
神戸大学学務部学務課気付  
E-mail: qen@qqqqlove.net  
きゅうえんたい通信電子版:  
http://blog.qqqqlove.net/?pid=6668  
●活動カンパ振込先  
郵便振込 01180-6-68556  
被災地NGO協働センター  
(通信欄に「足湯隊」と明記してください)

ききん・だより

「神戸大学基金」、次代を担う後輩のために！

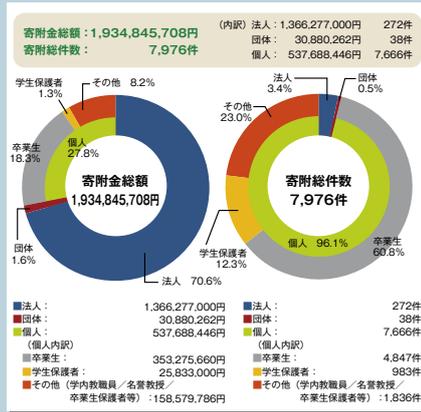
在学生の国際化対応、東京での情報発信機能強化などを計画  
「神戸大学基金」のたまた今の募金状況はグラフの通りです。ご協力いただいた皆様には厚くお礼申し上げます。しかしながら、「神戸大学ビジョン2015」の早期実現を図るためにはまだまだ不十分で、今後とも募金のお願いを継続してまいりますので、よろしくご支援いただけますようお願い申し上げます。

本誌で力パリーしていますように、神戸大学は社会貢献という領域において各方面で多くの人材が活躍し、また、それを支える教育・研究支援体制を有しています。読者の皆様には、このような活動にご理解をいただくとともに、活動をさらに広め、深化していくために、「神戸大学基金」を通じてのご支援をいただければ幸いに存じます。

「神戸大学基金」は他にも、在学生の国際化対応、東京での情報発信機能・拠点の充実、基金による奨学金の提供、全学共通グラウンドの人工芝化等に向けた事業を計画してまいります。

本学卒業生をはじめ、保護者の皆様、応援していただける個人・法人の皆様からの浄財をぜひとも「神戸大学基金」にお寄せ下さい。よろしくお願ひ申し上げます。

■図で見る神戸大学基金募金状況 (2010年(H22) 3.31現在)



■ご寄附いただく方法 (個人のみなさま)

お名前・住所・電話番号を下記の基金事務局までお知らせください。折り返し、払込取扱票一式をお送りしますので、銀行または郵便局からお振込みください。詳しくは下記のサイトをご参照ください。



【法人のみなさま】

所定の寄附申込書に必要事項をご記入の上、下記基金事務局まで郵送ください。折り返し、振込依頼書をお送りします。寄附申込書は、基金事務局に法人名・住所・電話番号をお知らせいただければ送付します。あるいは下記のサイトから書式ダウンロードすることもできます。



神戸大学基金事務局

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1  
TEL 078-8003-5414  
FAX 078-8003-5024



お知らせ

寄附者のみなさん！

一言メッセージをお寄せください  
神戸大学基金にご寄附いただいたみなさんへお願ひします。あなたの寄附行為の動機や、神戸大学への期待など、神戸大学基金をサポートする一言メッセージ(最大31文字程度)を下記メールアドレスまでお寄せください。紙面の許す限り無記名で掲載していきます。

■例えばこんなメッセージを…  
人生の旅路のサライとして大学がいつまでも在し続けるように。



TOPICS

平成21年度学生表彰一覧

神戸大学では、平成22年3月17日、出光佐三記念六甲台講堂で平成21年度学生表彰の表彰式および感謝状贈呈式を行い、終了後に懇談会を行いました。

近藤昂一郎/山岳部/理学研究科2年/カンリガルボ山群KG・2(6805M)の世界初登頂に成功。  
石丸祥史/山岳部/農学部2年/カンリガルボ山群KG・2(6805M)の世界初登頂に成功。  
田房夏波/EISS/国際文化学部3年/全日本学生英語会連盟主催の英語フィスカッション大会で優勝。  
川篤英之/馬術部/工学部3年/第81回全日本学生馬術選手権大会決勝で32人中11位(登録学生1173人中25位)。

フットサル部/第5回全日本フットサル選手権大会で2年連続優勝。  
ソフトボール部/2009年秋季関西学生ソフトボール選手権大会男子2部で優勝、1部へ昇格。  
戸高大志/剣道部/経済学部4年/キャプテンとして部員を統率。日韓交流親善試合の関西代表に選出。

大園 樹/発達科学部4年/関西学生アメリカンフットボール部リーグで3年連続最優秀ワイドレシーバー賞受賞。ノートルダム・ジャパン・ボウル2009日本代表に選出。  
恒岡新力/洋弓部/経済学部4年/キャプテンとして関西アーチェリー連盟男子2部で優勝。1部昇格。  
堤 佳奈/自由劇場/文学部4年/文化総務委員長として文科系クラブ全体のまとめ役になった。  
山本一乃/吹奏楽部/経済学部4年/部長兼主務として部員70名を統率。体育会クラブの応援に活躍。  
安部順子/人間発達環境学研究所博士後期課程2年/パウハウス・コンフェレンス2009から招聘を受け招待レクチャーを行った。

片岡 優/医学研究科修士課程2年/Scholar-in-Training Award 受賞。  
杉江敦司/工学研究科博士後期課程早期修了/論文賞BCSJ Award 受賞。

発刊のことば

神戸大学は、明治35年(1902年)の創立以来、開放的で国際性に富む固有の文化の下、「真摯・自由・協同」の精神を理念とし、社会に貢献する人間性豊かな指導的人材の育成と、普遍的価値を有する「知」の創造拠点としての教育・研究機関たることを目指してきました。

今、20世紀都市文明からの転換が激しく迫られる中で、大学にはその創造力を発揮して新しい21世紀文明構築のさきがけとなることが求められています。「神戸大学ビジョン2015」は、その第一歩として、「世界トップクラスの教育・研究」に卓越した社会貢献・大学経営の実現を目指しています。

「神戸大学基金」は、ビジョンの実現を加速するためのターボ装置です。ターボの力をより強力なものとするためには、神戸大学が社会により深く根を張り、そこからの支持と支援を拡大することが不可欠となっています。

本誌「神戸大学とわたし」Across the Boundariesは、神戸大学と社会の接点に取材し、ビジョンを先取りする取り組みを可視化することで、社会貢献の促進とビジョンの早期実現に資することを目的として発行されました。読者の皆様の忌憚のないご意見をお待ちしています。

2010年1月1日

※表紙題字下の「メタモルフォーゼ」は、生物学でいう「変態・変身」の意。本誌は神戸大学が21世紀に飛躍する様子を追いかけます。

神戸大学とわたし

Across the Boundaries  
通巻第2号 No.2  
2010年5月15日発行

発行人 国立大学法人神戸大学  
編集人 企画部社会連携課  
〒657-8501神戸市灘区六甲台町1-1  
TEL: 078-8003-5414  
FAX: 078-8003-5024

E-Mail: kikin@office.kobe-u.ac.jp

思い出の詰まった母校へ! **第5回** 2010年10月30日(土)  
 記念式典: 出光佐三記念六甲台講堂  
**神戸大学ホームカミングデー**

【予定しているイベント】

記念式典、第7回留学生ホームカミングデー、学部企画、中山正實画伯絵画展示、ホームカミング市、学生イベントなど

卒業生のみなさま・名誉教授の先生方に、現役学生・教職員との交流を深めていただく機会として、  
 今年も「ホームカミングデー」を開催します。

ゼミ・クラブ・サークル同窓会の同時開催もお待ちしています。みなさまお誘い合わせの上、お越してください。



●出光佐三記念六甲台講堂



*Toward Global Excellence  
 in Research and Education*